

福島県相馬郡飯館村における農地の現状調査レポート

震災が起こってから1年半、私はいつか被災地を見ておきたいと思いながらずると日常を過ごしていた。しかし、あることを契機に、あらゆるチャレンジをしよう、今のうちに様々な経験をしよう、と考えるようになり、今回の農地調査に応募した。

福島では様々な情報を聞きながら、直に状況を目にすることができて非常にためになった。ふくしま再生の会の活動や環境省など国の対応、除染の方法などが実体験を伴って知れたことは大きな収穫だった。福島に行く前は、ベクレルとシーベルトの違いや、どのくらいの放射線がどう人体に影響を及ぼすのかすらわかっておらず、震災や原発も自分の中で重要度を失い、記憶が薄れつつあった。しかし、実際に荒れ果ててしまいそうな飯館村でどうにかしようとしている人々を見ると、風化させてしまっただけとはいけないな、と思った。

印象的だったのは菅野宗夫さんがおっしゃっていた、地震や津波などの自然災害に被災した人々はどんなに損害が大きくても一致団結して立ち上がろうとするが、原発事故のような人為的災害の場合では、諦める人やどうにかしようとしようとする人などがいて、考えがばらばらでうまくまとまらない、という言葉だ。確かに、災害を誰かのせいにしてしまえば気は楽になる。しかし、このような非常時こそ誰かに責任を押し付けて思考停止にならずに、各々自分になにができるのかを考え、全員で協力していく必要があるのだと思う。口でいうのは非常に簡単である。私も思考停止にならずに、なにをすべきか考えていきたいと思う。

大きな問題ははぎ取った汚染土の処理と山の除染のようだと感じた。溝口先生が新たな汚染土の処理方法として側溝に土を埋めるということを提唱していたが、本当にセシウムが移動しないのならば簡単で効率的ないい方法だと思った。山の除染では木をすべて切り倒すわけにはいかないし、表土のはぎとりも難しく、どうしようもない状態のようだった。私はキノコに非常に高い濃度でセシウムが含まれるということに興味をもった。どうにかキノコを利用して除染できないだろうか。例えば、はぎ取った汚染土にキノコの胞子をばらまいてキノコまみれにして燃やして空気中に拡散させる、とか考えてしまう。キノコが土を浄化するなんてナウシカの世界のようだな、と思った。

スウェーデンから調査団がきたという話には驚いた。放射能の危険があるのに、わざわざ他の国まで行って自分の目で現状を確認し、自国のために情報を持ち帰る。この姿勢は見習わないといけないな、と思った。私もなるべく自分の目で見て、経験として情報を得ていきたいと思う。今回の調査への同行はそういう意味で私にとって大きな糧になったと思うし、しなければならぬと思っている。